

仙 台 教 区 報

発行所 カトリック仙台司教区
 仙台市青葉区本町一丁目2番12号
 ☎ 〇二二・二二二・七三七一
 編集・発行人 笹 気 直 哉

仙 台 司 教 区 宣 教 ・ 司 牧 態 勢



十一月十二日付けで、仙台司教区における
 宣教司牧の一区域として「宮城県南地区（大
 河原、角田、白石、亘理の四教会）」が設定
 された。同時に、この地区の宣教司牧の担当
 司祭として、兎山六七男師、村首ステファノ
 師、佐々木博師、平賀徹夫師の四名が任命・
 派遣された。

（なお、教会法第五一七項により、責任者は
 佐々木博師）

一九八七年元旦の司教書簡以来、ちょうど
 三年を経て、宣教・司牧の協力態勢が発足す
 ることとなった。

従来的人事異動は、四月に行われるのが通
 例であるが、豊田政夫師（大河原教会）が亡
 くなられたため、例年より早い任命・派遣と
 なった。

この三年間に、本部スタッフ（司教以下七
 名のメンバー）と各宣教会・修道会の管区長
 方との話し合いがなされ、宣教プロックとい
 う表現で小教区の壁を超えた協力態勢の在り
 方を検討してきた。

教区内の各地で、次々ところした協力態勢
 が発足されるのではないが、将来を展望する
 と次第にこうした形態をとっていくものと思
 われる。

こうした形態を取らざるを得ない背景に、
 司祭の高齢化や絶対数の不足があることも否
 めないだろう。しかし、もしそうした理由か
 らだけであるなら、将来の展望はない。なん
 らかの新たな視点が必要となる。

ひとりひとりの信徒がどんな役割を担うの
 か、ひとりひとりの司祭がどんな協力ができ
 るのか改めて問われることになる。それも、
 ひとりひとりを大切にしながら進めていかな
 ければならない。

新しいことにはいつも不安や恐れがともな
 う。しかし、いつでも、どこでも主を呼び
 求めるなら、私たちの主は必ず応えてくださ
 ると私たちは知っている。

宮城県南地区の信徒の方々は、四人の司祭
 と共に期待と不安の中で新しい態勢に取り組
 み始めた。

司 教 日 程



| | | |
|------|--------------|------|
| 1月1日 | 元旦ミサ | (仙台) |
| 2日 | オタワ会 | (仙台) |
| 7日 | 修道名祝い | (仙台) |
| 9日 | 司祭団役員会 | (仙台) |
| 13日 | 司牧評役員会 | (仙台) |
| 15日 | 16日カテキスタ研修会 | (一関) |
| 18日 | 常任司教委員会 | (東京) |
| 19日 | 難民定住委員会 | (東京) |
| 22日 | カリタス・ジャパン | (東京) |
| 31日 | 築館幼稚園落成式 | (仙台) |
| 2月2日 | 司祭団役員会 | (仙台) |
| 7日 | カリタス・ジャパン | (東京) |
| 9日 | 常任司教委員会 | (東京) |
| 10日 | 12日定住難民セミナー | (柏崎) |
| 15日 | カリタス・ジャパン | (東京) |
| 17日 | 18日NIOE推進委員会 | (東京) |
| 19日 | カリタス・ジャパン | (東京) |

お 知 ら せ

米川教会の元朝ミサ・ラジオで全国放送
 NHKラジオ放送の大晦日恒例番組、「ゆく
 年・くる年」で、米川教会（主任司祭・高橋
 昌師）の元朝ミサが全国放送されます。
 一月一日、午前〇時五分頃から三・四分間
 と思われまます。
 全国では二十万人以上の人々がこの放送を
 聴いています。一九九〇年代の幕明けにふさ
 わしい放送です。是非チャンネルをおあ
 わせください。

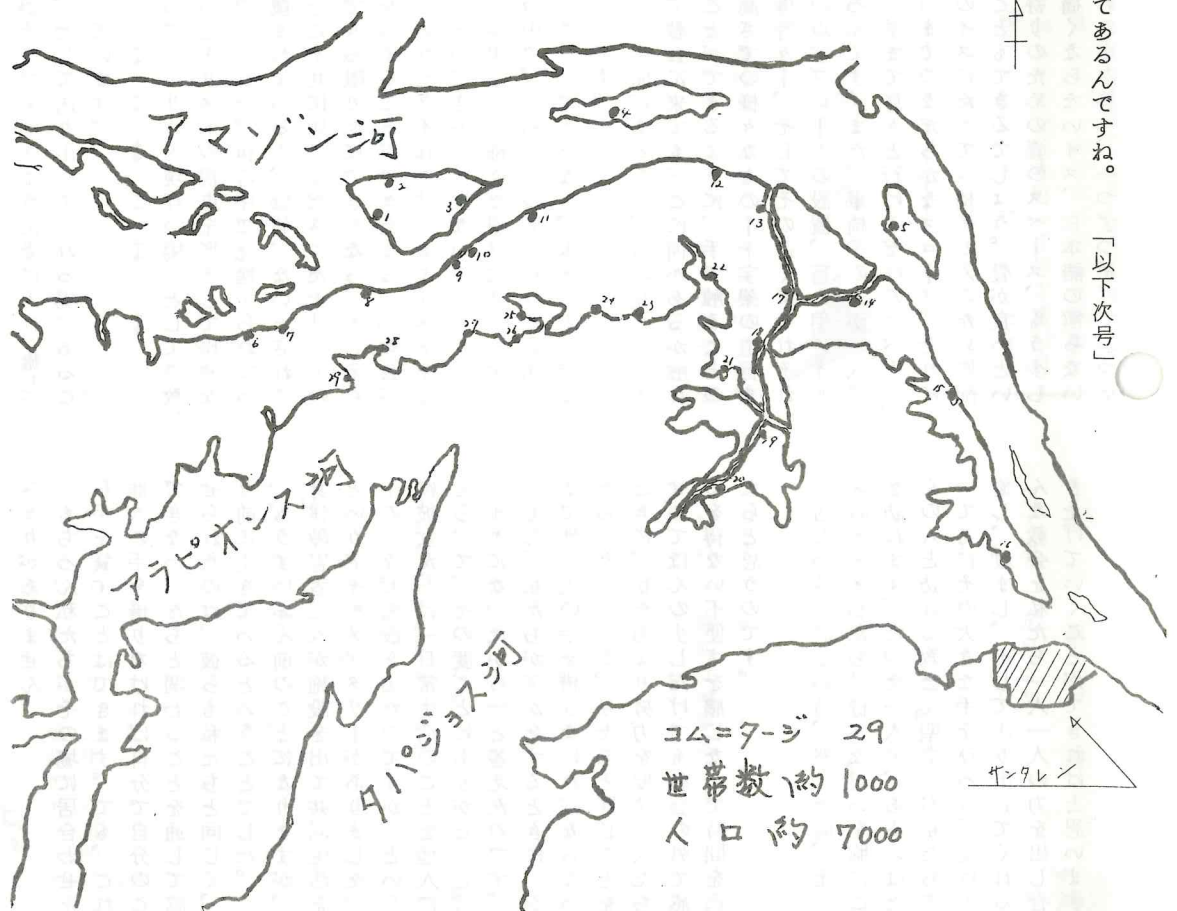
出て、上着を脱いで合図を送ります。そうすると船が進路をカノアの方に向け、止まってくれる訳です。時々、止まらずそのまま通り過ぎられる場合もあるそうです。

コムニタージ訪問では、まずカテキスタたちとの集まりをもちます。この集まりでは、コムニタージが抱えている問題、カテキスタとして直面している困難、ブラジルの教会・サンタレン教区の動きなどについての意見の交換を行います。また同時にミサのための典礼の準備も一緒にします。コムニタージに着いた日、あるいは翌日のミサ後、病人やミサにあげられないお年寄りを訪問し、望むならば聖体を授けることにしています。その時には、いつもたくさんの子供たちが同行してくれます。また、初聖体の準備をしているコムニタージでは、その子供たちを前にして、聖体・秘跡について話しをしなければなりません。ミサは普通午前中に行われますが、その前の晩はいつも「夕の祈り」があります。ミサの中ではしばしば洗礼式、初聖体、結婚式が行われます。

この二ヶ月間の経験、そして四月初めからの経験を合わせると六ヶ月間になります。その経験を通してコムニタージの大体の様子が分かってきました。そして今私を感じている一番大きな問題は、交通手段です。以前、この地で働いていた神言会の神父さんが宣教用の船を持っていた理由が、初めて身に染みて分かりました。実際にその地を自分の現場として働いてみなければ分からない、という

ことつてあるんですね。

「以下次号」



キリストとともに

＋わたしたちの教会＋

安藤 めぐみ
佐藤 裕子



受洗を目前にし、今「神を信じて生きる」という信仰の入り口に立った私、そんな私をこの空間『聖堂』が幾度受け入れ、癒してくれたことでしょう。思えば昨年、言い知れぬ不安を心に抱え、何かに助けを求めたいそんな気持ちを胸に訪れた教会で、久し振りに聖書に触れ、励まされ、そして気づいたときにはもうここで祝福を受けていました。そして回を重ねるごとに少しずつ受け入れられることの安らぎと、喜びを味わっていったのでした。体調を崩し今まで自信に満ち溢れていた心にポツカリと穴の開いた時、ここに来さえすれば元気になれるかも知れない、また、社会の成り行きに憤りを感じ、祈らずにはいられない。そんな気持ちを胸に幾度となくこの扉を開いたのです。ガランとして人一人いない時にも、人が一杯集まり溢れ出さんばかりの時でも、私はいつもキリストを通して癒され、励まされ、そして今「神の愛」を信じていると信じています。

皆それぞれに、それぞれの立場で教会『聖堂』への思いは深いと思います。今まで私にとってのそれは、常に両手をひろげて受け入れてくれるところでした。そしてこれから私がどんな立場、どんな境遇になつたとしても

今まではそれがそうであつたように受け入れ、癒し、励まし、そして送り出してくれる場であることを信じています。

＋＋＋＋＋

ところで「キリスト現存の場」としての教会にもっとキリストの視点を形として現せないものでしょうか。世の中で見捨てられている人、蔑まれている人、価値がないとされている人とこそ共に居てくださったキリストの視点をできる限り形にできたなら、もしそんな教会を建てることのできたなら、「教会がある」というただそれだけでもキリストを証しすることができるのではないのでしょうか。もちろん現実表面での様々な限界はあります。ただその中で、今私たちの考えられる範囲で最大限のことができたなら、本当に素敵だなぁと思うのです。

具体的に今頭にあるのは、目の見えない人が一人で教会に来てどこに何があるか触れて解ることができるよう、手で触ることのできる高さでの様々なもの―十字架の道行きマリア像等々―、そしてその近くにそれぞれの説明の点字プレート設置、盲人用トイレはもちろんです。また、車椅子の人が一人で来ても聖堂まで悠々と行けるだけのスペース、建物入口までのなだらかなスロープ、それに聖堂内のイスにだつて車椅子の人のために配慮することもできるでしょう。畳が良いというお年寄りのための畳のスペース、もう少し背中が痛くならないイス、日本語の解らない人のための案内等々、一つずつ挙げていったら

らきりがありません。

もちろん私たちがその場に居合わせたのなら手を貸すことはできます。でも、これまで他人の手を借りなければ自分で自分のことができないう人たちと関わることを通して感じさせられたのは、彼らも私たちと同じく、当たり前前に生きていくということでした。

もうずいぶん前のことになりましたが、重度身体障害者三人が施設を出て共同生活をするというドキュメンタリーがありました。その中の「なぜ施設を出たのですか」という問いに彼女たちは「日常生活のことを他人にしてみらつて、その度ごとにありがとうと言うのがイヤになつたから」と答えたのです。

もし、私たちが何かをするときに一から十まで他の人の手を借りなければならぬとしたらどうでしょう。私たちと同じことをするとき、私たちがより努力を要する人たちが、せめてほんの少しだけでも教会の外で感じざるを得ない不便さを感じないで時間を過ごせたらと思うのです。

苦しい時、悲しい時、怒つた時、そして喜ぶ時・・・私たちは様々な思いを胸にこの場を訪れます。たつた一人で、あるいはたくさんの人と訪れる教会『聖堂』が私たち皆にとって常にその大きな手をひろげ、受け入れ、癒し、励まし、そして送り出してくれる、そんな教会を私たち一人一人の力を出し合い創り上げていくことができたらと思います。